鹿児島県連合校長協会賞

ありがとう

鹿児島市立田上小学校　六年
宇都　詩叶

「コンコン。」
そこには満開の笑顔がありました
　四月の第三土曜日、私は塾に行くためバスに乗りました。そのバスには大勢の人が乗っていました。
「私、次のバス停で降りるから、ここに座ってどうぞ。」
誰かに声をかけられたので、横を見ると足腰が悪く杖をついているおばあさんが座っていました。
「大丈夫ですよ。」
本当ならば私が席をゆずる側だったから、「ありがとうございます。」といって座っていいのかわかりませんでした。そして、どうしたらいいのかわからないまま、立っているとおばあさんが降りるバス停につき、降りてしまいました。そのおばあさんは降りる寸前に、
「私が降りるまで待っていてくれてありがとう。」
と感謝の気持ちを伝えてくれました。私は、「自分がどのように行動したらいいのかわからなかっただけなのに。」と、はずかしくなりました。席に座ると、学生の人がおじいさんに席をゆずったりしていました。すると、私が降りる一つ前のバス停で、小さい女の子を連れた母親が乗り私の前のつり革につかまって立ちました。女の子は、じっとできずに動き回り、母親は困っているようでした。私はあのおばあさんのように、席をゆずりたいと思いました。勇気を振りしぼり「座ってどうぞ。」と言おうと小さく深呼吸をしました。
「あの私、次のバス停で降りるので、座ってどうぞ。」
しっかりと相手の目を見て言えました。しかし、不安もありました。それは、さっきの私のように、「大丈夫です。」と断られないかです。
「ありがとう。子供がすぐに疲れてしまって、寝てしまうから、困っていたところだったの。」
と笑顔で応えてくれました。私はとても、ほっとしました。
「お姉ちゃんありがとう。」
幼稚園児くらいの女の子も笑顔で、お礼を言ってくれました。「ゆずってよかった。」となんだか晴れ晴れしい気持ちで、お金を払いバスを降りました。
「コンコン。」
窓をたたく音が聞こえたので、振り向くと、女の子と母親が満面の笑みで、手を振っていました。女の子は言葉を発してはいませんでしたが、私にはもう一度、「ありがとう」の声が心にしっかりと届くのがわかりました。
　これからもバスに乗る機会はますます増えます。私はこの出来事を忘れることのないよう心に刻み、常に温かい気持ちでバスを利用したいと思います。
　バス停の近くの街路樹の下には満開の紫陽花が咲いていました。私は気付けば鼻歌を歌いながら、塾に向かっていました。

【審査評】

作品を読み終わると、爽やかな温かさが読む人を包み込みます。席をゆずりあう様子や人物の心情が、書く材料をよく吟味していねいにえがかれていて、構成も巧みに工夫されています。「満開の紫陽花」、「鼻歌を歌いながら」などの表記も、詩叶さんの気持ちを見事に表して素晴らしいと思いました。